月刊

こころのとも

第十巻
十二月号

気にかかること

他人のことが
気にかかる

自分を
好いてくれているか
認めてくれているか
支持してくれているか
気にかけてくれているか
そんなことばかりが
気にかかる

自分が
何をしたら
嫌がっているか
何をしたら
喜んでいるか
そんなことには
まったく
気がいかない

社会の行く末

五歳でも
平気でうそを
つく子ども
今後の社会
どうなるのかな

人生を考え直して

みたい人は（七一）

―『正法眼蔵』解説（一五）―

現成公案の巻を続けます。

麻谷山（まよくさん）宝徹（ほうてつ）禅師、あふぎをつかふ。ちなみに、僧きたりてとふ。「風性（ふうしょう）常住、無処不周（むしょふしゅう）なり、なにをもてかさらに和尚あふぎをつかふ」。師いわく、「なんぢただ風性常住をしれりとも、いまだところとしていたらずといふことなき道理をしらず」と。僧いわく、「いかならんかこれ無処不周底の道理」。ときに師、あふぎをつかふのみなり。僧、礼拝（らいはい）す。

仏法の証験、正伝の活路、それかくのごとし。常住なればあふぎをつかふべからず、つかはぬをりもかぜをきくべきといふは、常住もしらず、風性をもしらぬなり。風性は常住なるがゆゑに、仏家の風は大地の黄金なるを現成せしめ、長河の蘇酪（そらく）の参熟（さんじゅく）せり。

正法眼蔵現成公案

これは、天福元年中秋のころ、かきて鎮西の俗弟子楊（よう）光秀にあたふ。

例によって、玉城康四郎氏の『現代語訳　正法眼蔵』（大蔵出版刊）の訳を紹介しておきます。

麻谷山の宝徹禅師が扇を使っていたが、そのとき、僧がやってきて尋ねた。

僧「風性は常住で、あまねくゆきわたらない所はありません。どういうわけで和尚は扇を使われるのですか」

禅師「おまえは、風性の常住なることは知っているが、あまねくゆきわたらない所はないという道理が分かっていない」

僧「では、あまねくゆきわたらない所はない道理とは、どういうことですか」

とのとき、禅師は扇を使うだけであった。僧は礼拝（らいはい）した。

仏法における実証のしるし、釈尊から正しく伝わってきた活路は、まさにこのようなものである。風性は常住であるから扇を使う必要はない。また扇を使わないときも風は吹くであろうというのは、常住

も知らず、風性も知らぬものである。風性は常住であるから、仏者の家風は、大地をして黄金の仏土たらしめ、長河の水を蘇酪（そらく）というすぐれた飲みものとするのである。

正法眼蔵現成公案

これは、天福元年（一二三三）中秋のころ書いて、鎮西（九州のこと）の俗弟子・楊（よう）光秀に与えたものである。

この部分は、馬祖道一（ばそどういつ＝七〇九～七八八）という中国禅の実質的な創始者の法嗣（師から仏法の奥義を伝授された弟子）である麻谷山（まよくざん）宝徹禅師の、扇の使用をめぐる問答を題材にして、仏教の悟りとは何かを説いたものです。

ここでのキーワードは「風性常住　無処不周」ということです。文字通りの意味は「風は常に吹いていて、周（めぐ）らない処は無い」ということです。

なのに、師の宝徹禅師はなぜ扇を使うのか、というある弟子の問いかけです。

この話はたとえ話になっていますので、この話を、理解する上で、「風性」を、「仏性」だと考えて頂ければ、お分かりになりやすいのではないでしょうか。

この世のあらゆる存在が、仏の贈り物として、仏性をもっています。人間以外の場合では、全ての存在は、仏の贈り物としてそのままで仏なのです。しかし、悲しいかな人間の場合は、そのままで仏ではないのです。これが、この話を理解するのに決定的に重要なように思えます。少し説明をして行きます。

難しくなるのですが、哲学的に言いますと、人間が動物から人間に進化したとき、人間に対しては「物質」や「生命（動植物）」にはない、「精神」が与えられました。それは、どういうことでしょうか。

私以外の哲学者や科学者はそうは考えていませんが、私の理論ですと、それは、他者とこころを通わせ合うことができるようになったということと同義なのです。ことばを変えますと、神や仏のような私たちの存在を超えた力を信じることができるようになったということと同義なのです。実は、それが、人間にだけ自分の存在の意味を知ることを可能にしたと言えるのです。その結果として、人間は言語を自由に使うことができるようになりました。それは、換言すれば、規範や伝統や文化・文明を生み出すことができるようになったということでもあります。

しかし、ここに人間にだけに課された重荷があります。それは、人間だけが、そのままでは仏とは言えないとい

う宿命を負ったということでもあります。どういうことでしょうか。

人間は、神や仏を信じ、こころを通わすことができるようになることで、人間に成れたのですが、しかし、逆に、その結果として生み出した文化・文明によって、そのことを忘れ、動物と同じレベルに堕して、自分のエゴばかりを主張しようとする危険性を常に持つように成ってしまった、ということでもあるのです。文明が発達して自己の存在の可能性（永続性）が高まれば高まるほど、自己が肥大し（他己が萎縮して）その危険の程度は高くなって来るのです。ここに、人間の悲しさがあります。

なかなか理解して頂けないのですが、それを克服する道は、苦しいことですが、自己の気まま（自己肥大）を制して（他己を回復するために）ひたすら修行をすること以外にはないのです。

若いころ道元は、仏性を誰でもがもっているのに、なぜ修行しなければならないのかを、納得することができなかったようですが、それは、このように、人間にだけ課せられた、宿命といえるものなのです。

人間は、そのままでは、仏ではないのです。私の理論で言いますと、無意識に宿した仏さま（如来蔵）を磨いたときだけ、人間は人間になれるのです。その結果、人の痛みをわが痛みとし、人の喜びをわが喜びとすることができるようになれるのです。自分を制して、他者と情動の共有をすることができるようになれるのです。

本文に返って検討してみましょう。

「風性常住」とは、人間には仏性が常住している、ということの比喩と考えられます。次の「無処不周」ですが、ここが問題で、難しいところです。

確かに、物理現象としては、風がゆきわたらない処は無い、つまり、仏性の現れでないものは無いのです。それは、本能のままに行動している動物では、それでいいのですが、しかし、人間になりますと、さきほど述べましたように、違ってくるのです。

人間は、仏性を宿していますが、文化・文明をもち、自己肥大を必然的にもつようになってしまった結果、仏性が、その「垢」によって覆われて、悲しいかな、そのままでは現れ出なくなってしまっているのです。

ですから、ここで出てきましたように、僧が「いかならんかこれ無処不周底の道理」と禅師にたずねても、禅師は、だまって、ひたすら扇を使っていたのです。それは、仏性が現れ出るために、ひたすら修行をするということの比喩になっているのです。

最後の次の部分のみ、もう少しふれておきます。

「風性は常住なるがゆゑに、仏家の風は大地の黄金なるを現成せしめ、長河の蘇酪（そらく）の参熟（さんじゅく）せり」ですが、これまでの解説でお分かりと思います。

あらゆる人が仏性を宿しているが故に、あらゆる人が、修行・精進することでその仏性を磨くならば、比喩として、この大地が黄金の大地のように思えるようになり、大河の水がすべてヨーグルトのような甘美な味と思えるようになることができる、と言っているのです。

それは、具体的にいいますと、誰もいない、淋しい山のなかであろうと、どこに住んでいても、そこが楽園だと感じることができるようになる、ということです。また、玄米であろうと、芋であろうと、どんな粗末な食事でも、美味に感じることができるようになる、ということです。

しかし、それには、ひたすら聖人の教えを信じ、仰ぎ、ひたすら教えに従って修行しなければなりません。そうする時だけ、「風性常住」でしかも、「無処不周」と言えるようになるのです。人間にだけ、仏性が輝き出て、自己の存在の意味を知り、絶対的な安心（大楽）が得られ、あらゆる他の存在に対して謙虚になり、あらゆるものを照らすことができるようになるのです。

自作詩短歌等選

自己実現と他己萎縮

自己実現
すればするほど
他己萎縮
多くの人が
目指すけれども

虐待悲惨

虐待の
ニュースの出ない
日とて無し
母性も父性も
共に消えたり

国立大学国旗掲揚

大学も
国旗掲揚
いたします
そむけばリストラ
待っているから

先生は友だちか

友だちの
ように振る舞う
先生が
父母に好評
得るご時世は

セクハラ解決法

セクハラを
受けたら直ぐに
大声を
出して助けを
求めよう
曾野綾子氏の
ご助言にござる

児童虐待防止法

日本でも
遂に出てきた
児童虐待
防止法
出すほどひどい
社会の病理

無法の世の到来

昔なら
考えられぬ
殺人が
こうもしばしば
起こるのは
まさに無法の
世の到来ぞ

愛は自己愛

いま
愛は
自己愛のみ

他人のあらさがし

集まって
するは他人の
あらさがし
ゴミ収集の
井戸端会議

貧しく老いる

若者が
競争さけて
働かず
就職しても
すぐやめる
豊かに育って
貧しく老いる

人格の完成とは

教育の目的は
人格の完成にある
では
完成された人格とは
どんな人格
人格を完成させるには
どうしたらいいの

それは
不思議にも
幼稚園から大学までの
どこでも
教えていないこと

人権には人義

人権を言うなら
人義も言え

そうしないと
自己ばかり肥大して
他己が
萎縮してしまう

自己の権利を主張しても
他者に
それを認めるこころ
（他己）がなければ
お互いの
真の幸せは来ない

わる・ずる賢い人

大学の
ネズミ使った
実験で
あたま良くする
薬でき
人に応用
できそうだとか

これ以上
あたまよくなりゃ
この世界
わるとずるとが
つく人あふれる

自作随筆選

資本主義の行く末

十一月八日付けの日本経済新聞の「経済教室」「ミレニアム　新時代を切り拓く」という欄に、ソニーの社外取締役になるために国立の一橋大学をやめ、私立の多摩大学に移った中谷巌教授が、次のような見出しで記事を書いていました。

資本主義に大調整の波
情報革命の加速で
資本移動など対策不可欠

この記事は、ソニーが社外取締役にしたいという人だけあって、記述は明確ですし、現状認識も確かなもののように思いました。

しかし、資本主義の変革によって起こる否定的な面の解決方法やプラス面の評価が、まったく楽観的な空想と思えるようにものしか用意されていない点で、極めて不満に思いました。そのことを、少し検討してみたいと思

います。

この記事は、いま起こりつつあるデジタル情報革命によって世界経済が、産業革命に匹敵するビジネス・パラダイム（枠組み）の転換と産業社会の激変を経験するが、その変化とそれへの対応について書かれています。　そうした変化は、既に始まっているものが大多数なのですが、その中で私が心配していることの一つは、グローバリゼーションに伴う過激な競争社会の出現とそれに伴う寡占化・独占化、それは、必然的に優勝劣敗・適者生存による貧富の差の、個人間だけではなく国家間における拡大＝不平等化をもたらすこと、ともう一つは地球環境の一層の悪化です。

これらの問題を解決するには、相互信頼関係の樹立と国際的な調整努力とが必要であることは、この人も指摘しているのですが、それがどうすれば実現できるのかについての名案（見通し）は、全く示されていないのです。

私は、この人が示さないのは、示すものがないからだと思うのです。資本主義は「利益と選好」を追求する社会的仕組みで、もしそれで、人々が満足させられれば、実は、その程度に応じて、人々は「他己」を萎縮させ、「自己」を肥大させていくのです。それは、必然的に人と人との関係を破壊する力となっていきます。

経済的に繁栄すればするほど、「自己」が肥大し、他者との関係を調整する働きである「他己」が萎縮して、人々のこころが貧しくなり、人との信頼関係が崩れるとすれば、経済的問題を解決する道は、経済原則の中には存在しないことになります。

ですから、資本主義という経済的仕組みの中で、経済学者が、このように経済の原理を超えている人と人との間の信頼関係や人々の間を調整をする原理を見つけることは不可能なことだと言えるのです。

二つの問題を解決する道は、私は、国際化（グローバリゼーション）ではなくて、特定の地域で人々が他己を発達させ、「こころ」を通わせて暮らす地域社会化（コミュニタイゼーション）でなくてはならないと思うのです。特に、食料問題がからむと、そう言えます。

自己の利益と選好を追求する経済原則で行動すれば、人間の生存にとって欠かせない食料を、もし輸入にだけ依存する国や地域があるとすれば、その国は他国の利益・選好追求の手段として利用されることは明らかです。

いま、世界には餓死者が多数出ている国がありながら、でも、日本人は贅沢三昧で、残飯をたくさん出して捨てている現実があります。問題をはらむ経済の発展よりも、まず、他己の回復が求められる所以（ゆえん）です。

『倚りかからず』の本

先月号で取り上げました表題の本の広告が十一月十四日付けの毎日新聞に載りました。この本は、「朝日新聞『天声人語』・読売新聞・毎日新聞ほか、各紙・ＴＶで紹介され、大きな反響を呼んでいます。」と出だしに書かれています。そして、著者名（茨木のり子氏）があり、書名があって、先月号で紹介しました詩の後半が載せてあります。そして、その後に、この本に対する反響文が引用されています。その中に次の文章がありました。

「この詩は、まさにぼくが理想にしている『まっすぐに生きる』ということをシンプルに語っていますね。この詩人は強い人ですよ。我々は、寄りかかりたくなるんですね、弱いから。・・・でも背筋を鍛えるとね、もう『背もたれ』もいらない（笑い）」。

前月号に続いて、驚きです。

ここで言われている「まっすぐに生きる」ことが理想であるとは、著者の茨木のり子氏と同様に、まさに自己へ執着することを肯定して生きて行きたいと、言っているのだと思えます。

人間は、まっすぐに生きていると思っても、曲がって生きているのです。明るいところを歩んでいると思っても、暗いところ（無明の闇）を歩んでいるのです。ですから、相対な人間が、まっすぐに、明るく生きるためには、そのための灯や、羅針盤あるいはコンパス（方向磁石）ようなものがいるのです。それは、ここの文脈で言えば、倚りかかるもの、背もたれと言えるものなのです。

ところで人間の人間たるゆえんは、人とこころを通わせ合おうとする精神の働きをもっているからなのです。それは、人と互いに依存し合う働き、とも言えます。人と互いに依存し合うことは、難しく言いますと、社会定位と言えます。ですから、私たちは、社会に定位しているから、あるいは定位している時だけ、悪を為さずに、生きて行けるのです。その定位する対象が、ここの言葉で言いますと、倚りかかるものなのです。そのもっとも頼りになる（倚り甲斐がある）のが、絶対他者と言える「神・仏」なのです。この神・仏こそが、人生の灯台や羅針盤や方向磁石なのです。

そうしたものを頼りにしながらでも、私たちは、常に左へ行ったり、右へ行ったり、進んだり、退いたりしているのです。ところが、現在は、多くの人が、倚りかかるものを失い、自分では真っ直ぐに、善いことをしている積もりで、悪を為して生きているのです。

釈尊のことば（八七）

―法句経解説―

（二九五）（「妄愛」という）母と（「われありという慢心」である）父とをほろぼし、（永久に存在するという見解と滅びて無くなるという見解という）二人の、学問を誇るバラモン王をほろぼし、第五には（「疑い」という）虎をほろぼして、バラモンは汚（けが）れなしにおもむく。

先月号の（二九四）と、この（二九五）では、滅ぼすものが④までは同じです。この偈では⑤が「第五には疑いという虎」ということで、異なります。

この偈では、前の偈と違って、自分自身だけのことではなくて、他者との関係に言及しています。つまり、対人関係の基本をなす疑い、不信を滅ぼせといっているわけです。つまり、人を信頼せよ、仏さまを信じよといっているわけです。

現代人は、民主主義・個人主義・自由主義のお陰で、だんだんと神や人を信じることができなくなっています。

それは、個（自己）への執着がますます強まっているからです。

信には、自信と他信（こんなことばはありません。一般には信頼と呼んでいますが、自信ばかりが強調されますので、こんなことばも必要になっていると思います）があるのですが、現代人は欠点が長所とばかりに、悪いところまでも自信を形成するもとにしていて、皆が自信過剰に陥っています。

ここでいう「疑い」は、他者に対する信の欠如です。真の信は、自信と他信の統合なのです。心理学でよく使うことばでいいますと、自己信頼感と他者信頼感の統合と言えます。しかし、「あたま」で他者を信頼しようと思ってもなかなかできるものではありません。それには、修行がいるのです。ヨーガ・坐禅・瞑想・読経などの修行がいるのです。

（二九六）ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、夜も昼も常に仏を念じている。

（二九七）ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、夜も昼も常に法を念じている。

（二九八）ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、夜も昼も常にサンガ（修行者のつどい）を念じている。

実は、この三つの偈と内容を同じくする偈が、既に、出てきました。それは、第八巻（平成九年）二月号で取り上げました（一九〇、一九一）がそれです。その偈を念のために再掲しますと、次のようになっています。

（一九〇、一九一）さとれる者（＝仏）と真理のことわり（＝法）と聖者の集い（＝僧）とに帰依する人は、正しい智慧をもって四つの尊い真理を見る。――すなわち①苦しみと、②苦しみの成り立ちと、③苦しみの超克と、④苦しみの絶滅におもむく八つの尊い（八正道）とを（見る）。

その時にも「仏法僧の三宝への帰依」や「四諦」「八正道」などについて解説しています。古いのをお持ちの方は、もう一度ご覧いただければ幸いです。以下は、その時に書かなかったことを、述べてみたいと思います。

この偈で言っています、ゴータマとは釈尊の生家の姓で、この姓によって釈尊のことを意味しています。次に、三つの偈に共通な覚醒ですが、それは、精神が緊張した状態です。具体的な行動で言いますと、道元も、道を求めるものは「余技」をしてはならない、といっていますように、その余技をしたいと思わない状態です。覚醒していますと、道を求めることひたすらになるのです。

この三つの偈は、前述のように、「仏法僧の三宝への帰依」と言われるものです。例えば、真言宗在家勤行式には「開経偈」「懺悔文」に続いて「三帰」があります。その三帰は、次のようになっています。なお、この三帰は、真言宗だけではなく仏教のどの宗派でも重要視しています。三度唱えます。

弟子某甲（でしむこう）　盡未来際（じんみらいさい）　帰依佛（きえぶつ）　帰依法（きえほう）

帰依僧（きえそう）

いつも、言っていることですが、私たちは、自分で生きている、自分が独自の思想をもっている、自分も釈尊と同じように尊いのだ、などと思っていますと、他者の「こころ」が感じられなくなりますが、そればかりではありません。何が善いのか悪いのか、何が正しいのか間違っているのか、何が美しいのか美しくないのか、なども分からなくなってしまうのです。そして多くの問題行動を引き起こします。

いま、現代人は、世界的にそうなっているように思えます。特に日本の若者が、その傾向が大のようです。それは、大人がそうだから、その反映として、少し拡大して、そうなっているだけなのです。その原因の一端は、余りにも急速に経済的に豊かになって、余りにも急速に自己肥大（他己萎縮）に陥ったためだと思えます。

後記

一、寒くなり、急に冬らしくなってきました。早くも、もう師走十二月となりました。

二、畑のジャガイモを掘りました。開墾後はじめての作付けで、出来が悪かったのですが、段ボール三箱とれました。毎朝、既に収穫していますサツマ芋といっしょに頂いています。

三、その他、野菜はよくできて、毎日のように頂いています。大根、かぶ、ほうれん草、春菊、にら、小松菜、などです。キャベツも種から蒔いた苗が育ち、定植しました。タマネギも同様で、先月定植しましたが、あまりよく育っていません。開墾後、苦土石灰をまいて中和したのですが、酸性がまだ残っているようです。

四、十一月末の広島大学での中国四国心理学会に出席しました。連名で、現職ゼミ生が「学習障害研究に対する新仮説の提示とその検証」と題して発表してくれました。

五、その概要を紹介させて頂きます。新仮説の提示とは、これまでの認知―言語障害説や感覚―運動障害説に対して、自我―人格障害仮説を提示したことです。自我―人格は、認知―言語、感覚―運動、情動―感情を、自分の行動目的を遂行するために、監視し、統合をはかっています。学習障害児では、その機能が障害されていると考えるのです。ですから、障害はそれぞれの精神機能に現れます。このことをデータで確認するために、学習障害児の行動特徴とされた個々の行動の存否をきく質問項目を一五〇余り作り、九〇〇〇部ほど配りました。そして、回収できた中の九〇〇名あまりのデータを統計的に分析しました。その結果、一〇尺度が構成できました。詳しくは述べませんが、それは、まさに自我―人格障害仮説と私の理論の正当性を裏付けるものでした。今後、この研究結果が、学習障害児の福祉・安寧に役立つことを願っています。

六、風邪に気をつけられ、よいお年をお迎え下さい。

月刊　こころのとも　第十巻　十二月号　（通巻一二〇号）

平成十一年十二月八日
〒７７２―８５０２
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号０１６１０―８―３８６６０